
幸せを伝えて

そらのはて

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せを伝えて

【Nコード】

N8899A

【作者名】

そらのはて

【あらすじ】

信と亜矢と結衣しんの三角関係の話。信は亜矢と付き合っていたが、その内結衣という存在がでかくなり二股みたいな状況になってしまふ。亜矢と結衣は嫉妬という壁で仲が悪くなり、さらに状況は悪くなって亜矢は事故で亡くなるが、それでも亜矢はこう言ってくれた。「二人が幸せなら私も幸せ」と。

夏の太陽がオレの体を照りつける。

熱い

暑い

あつえよ。

まったく、

クーラー入った部屋に引きこもりたい気分だ。

でも、そんな事したら彼女から崇られそうで怖いな。

オレは今、彼女の墓参りをしてる。

これだけはやらないと彼女に殴られそうだからな。
本当にそこにいそうだから・・・

水を墓の上からかける。

酒を置いて

オレは酒を飲む

彼女がいつか一緒に酒を飲みたいって言ってたから。

「うえー、苦え」

そりゃそうだオレは高校生であり未成年だから

でも、彼女はなぜか酒を飲んだ。

「飲ま飲まイエイ！」

つとか言いながら飲んでたな。

・・・懐かしいな

まったく、何で死んだんだよ。

オレはまだ、おまえの事必要だったのに。

最後に言ったのが、

「二人とも一緒にね。私は結衣と幸せになってほしい。私はもう時間がないから」

っだったけ・・・

最後までおまえの彼女に居たかったのに
何で、またそんな事言っただろうって思った。

「うう・・・」

涙がでそうになったが

約束の時間通りに結衣がきたので泣かなかった。

「よっ！」

「ん、よっ」

結衣より低いトーンで答える。

「なんか目が赤いね」

「ああ、さっき泣きそうだったけど、おまえ来たから泣くつにも泣けなかった」

「あちゃー最悪なタイミングで来ちゃったね」

「ああ、最悪なタイミングだ」

本当の事を言う。そしたら彼女が何を思ったのか、いきなり

「・・・ねえ、私の胸かそうか？」

「いや、したいのは山々だが亜矢の墓前だ。そんなことしたら、夢にも出てきて殴られそうだ」

「なんか信^{しん}・・・優しくなったね。普通だったら、おまえみたいな平面な胸なんか嫌だっとか言いそうなのに」

「うるせえな。そんな余裕がないんだよ」

「信・・・そんな無理しなくていいのに」

「亜矢の墓前だ。その時ぐらい亜矢の恋人でいさせてくれ」

「そう・・・」

結衣は俯きながら言う

結衣の表情はどことなく寂しげで、はかなく今からでも壊れそうな感じがした。

「なあ、おまえ。これからどうするんだ？」

「さあ？分かんない。それより・・・」

結衣はなぜか、顔を赤らめる。

「ん、何だ。それより？」

「うん、私、代わりになれるかなーって」

うわっ、すごく赤くなってる。

こういう時の結衣はかわいくて新鮮だ。

亜矢にはない可愛さがある。

「そんな事、もう関係ない。おまえはおまえだ」

「そう……。だったら付き合ってくれてるって事？」

「・・・ごめん、やつぱり、今はまだ無理だ。亜矢が死んでも、まだオレは亜矢のほうが好きなんだ」

「ははっ、妬けちゃうな。まだ、好いてるなんて」

結衣は皮肉をこめて言う。

「そりゃそうだ。まだ、未だに亜矢が死んだって実感がないし。まだ、亜矢がいそうな気がしてたまらない」

「そうだねー。未だに亜矢が近くにいなそうな気がするもんね。でもね、亜矢は死んだんだよ。本当に今からでも「よっ元気!？」」

「つとが行って出てきそうだけど亜矢はもういない。いない人に恋をするなんて悲しいと思うよ」

「・・・コイツもたまには重い事を言う。ただの馬鹿だと思っっていたんだが。」

「なあ、おまえってさあ、亜矢と仲よかったのか？」
「表向きは・・・ね」

結衣は沈んだ顔になり俯いた。

「それじゃあ、やっぱり仲悪かったんだな」

結衣はまだ俯きながら。

「信のせいだよ。信は知らないかもしれないけど、両方とも嫉妬してたんだよ。しまいには」

「私の信を盗らないで！」
「つとか言う事もあった」

「おまえがか？」

「違う。亜矢だよ」

「そうか。でも、おまえだつて悪いぞ。オレと亜矢が一緒にいる時、さりげなくオレにアピールしてたじゃんか。あの時すげえ亜矢が不機嫌になってさあ」

「私と結衣どっちが大事なの！？」
「つて言つて大変だったぞ」

「あはは、そうなんだ。ごめん。」

「別に謝んなくていいさ」

「信、やっぱり気づいてた？その時、私が好きだつて事」

「んにゃあ、とつくの昔に知ってたよ」

「それって酷くない？なんなら言ってくれたらいいのに」

「あほ、亜矢はオレとおまえ三人そろってこそ大事って言ってたんだ。あそこで、おまえに諦めさせてたら意味が無くなる」

「えっそれってどういう意味？」

「亜矢は表裏、どっちにしろおまえの事、大事にしてたんだ。しまいにゃ、別れ際に結衣と幸せになってねって言うぐらいだ。逆に悲しくなる」

「そう・・・なんだ」

結衣は泣きそうな表情になっていた

「私も信と亜矢が幸せなら、幸せだっと思っていたけど。我慢出来なくなっって行動に出ちゃって・・・悪い事したな。最後ぐらい海とが行きたかったな」

「ああ、三人で海行きたかったな」

「私、何で最後まで仲よくできなかったんだろう」

コンクリートの上に雫が落ちる
決してそれは雨じゃなく
悲しい時に出る雫で

「結衣・・・」

オレは結衣を抱いてた
結衣の頭を胸に擦りつけるように

「しん・・・いいの？亜矢の墓前だよ」

「これぐらい、いいさ。別にやましい事してないし」

しばらくすると。

「ありがと、大分落ちついたよ」

結衣は少し無理をして笑った。

「そうか、じゃあ行くか？」

「うん、でも、どこに？」

「どこでもいいさ。その辺をブラッとデートさ」

「じゃあ、アッチ行ってみようか？」

今度は無理して笑わなかった。

やはり、こう自然と笑ってくれるのが1番いい。

「ああ、それじゃ行くぞ」

「うん」

結衣はそう言うとおれの右腕に胸が当たるようにくっつけた。

コイツ胸が意外にでかくなってる。

まあ、まだ亜矢には劣るけど

だけど、それはそれ。

これはこれ、だよな。

亜矢の事は忘れるべきだろうけど、それでも忘れてはいけない。

亜矢がいたおかげは今のオレがいる訳であるから。

亜矢……ありがとな。

そして、さよなら。

オレは……いや

僕は

結衣と

幸せになります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8899a/>

幸せを伝えて

2010年12月1日06時58分発行